

| | | | |
|---------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|------|
| 氏名(本籍) | ねもと のりこ 根本典子(茨城県) | | |
| 学位の種類 | 博士(言語学) | | |
| 学位記番号 | 博乙第1591号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成12年3月24日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当 | | |
| 審査研究科 | 文芸・言語研究科 | | |
| 学位論文題目 | A Construction Grammar Approach to Polysemy: The Division of Labor between Verbs and Constructions (多義性への構文文法的アプローチ: 動詞と構文の役割分担) | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | Ph. D. | 中右實 |
| 副査 | 筑波大学教授 | Ph. D. | 原口庄輔 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(言語学) | 鷲尾龍一 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | 文学博士 | 廣瀬幸生 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | Ph. D. | 竹沢幸一 |

論文の内容の要旨

本論文は、フレーム意味論 (frame semantics) の視野を最大限に取り込むことで英語の動詞の多義性を究極まで突き詰め、そのうえで構文文法 (construction grammar) の役割分担を明確化しようとする実証的研究である。

本論文の構成は、はじめに「序説」を置き、それに本体の6章が続き、最後に「結論」が来る。

まず、第1章では、構文文法のひとつの雛型として注目を浴びている Goldberg (1995) の理論が批判的に検討される。たとえば、(1) に示す動詞 kick の用法の多様性は、Goldberg によれば、構文型の違いによるものであり、kick の意味の違いに還元できないという。

- (1) a. The horse kicks. (*kick* + intransitive construction)
 b. Pat kicked the wall. (*kick* + transitive construction)
 c. Pat kicked a football to him. (*kick* + caused-motion construction)
 d. Pat kicked Bob the football. (*kick* + ditransitive construction)

すなわち、括弧内に示すように、どの文でも kick の意味は同じであって、つまり単義であって、用法上の違いは構文型から派生するとみている。

しかし、この分析には問題がある、と本論文の著者はみる。① (1b-d) の用法では、kicker (蹴る人) と kicked (蹴られるもの) が含まれるが、(1a) には kicked は含まれない。さらにまた、② (1b) と (1d) に等しく含まれる kicked の項には無視できない違いがある。つまり、(1d) の場合には、kicked の項は蹴られて移動する実体でなければならない。かくして、Goldberg のように、動詞 kick をただ kicker と kicked を含む出来事として規定し、すべての違いを構文型の違いに還元する分析では、以上の事実は説明できないと結論づける。

第2章では、フレーム意味論を最大限に活用することによって Goldberg の分析の問題点を克服する対案が提示される。(2) のようにまとめられる。

- (2) a. leg-movement *kick* + intransitive construction
 b. contact-by-impact *kick* + transitive construction
 c. contact-by-impact *kick* + caused-motion construction

d. caused-motion *kick* + ditransitive construction

これによると、kickは多義で、基本的に二つの意味が区別される。それらは①leg-movement *kick*と②contact-by-impact *kick*である。そして②の拡張としてcaused-motion *kick*があるとみる。とりわけ、(2a)はそれ以外の場合と、その出来事がkickerだけを含むか、それともkickerとkickedを含むかで峻別されていること、二重目的語用法(2d)は(2b)よりむしろ移動使役用法(2c)に近い関係にあることが捉えられている。

第3章では、(3)で示すような、saveという動詞の二重目的語用法の分析を通して、動詞の多義性を前提とした構文文法的アプローチの有効性が例証される。

- (3) a. John saved his boss the business letters.
b. The director saved the section chief the trouble of sacking Bill.
c. Steve saved Mary cooking time.
d. If you buy the family-size box it will save you £1.

これまでの研究では、(3)の個別用法が相互にどのように関連づけられるか、また(3a)が“X intends Y to have Z”と解釈されるのに対し、(3b)が“X causes Y not to have Z”と解釈されるのはなぜか、といった問題が考えられていない。しかし本論文では、saveに救助、保管、節約という3つの認知フレームを導入することで、これらの問題に答えようとする。まとめていえば、いずれのフレームも「価値あるものを守る」という共通概念でくくられるが、個別例によって保管や節約のフレームが喚起され、それが対応する構文型の意味とつながってくるのだと説明される。

第4章では、語彙的多義性と構文の多義性という概念を改めて見直し、動詞と構文の役割分担を適正に捉える理論の必要性が論じられる。ここでもまた、Goldbergの分析が検討され、動詞よりも構文の働きが強調されすぎる側面が指摘される。いちばん問題になるのは、同一の動詞の同一の構文型において異なる意味を表わす場合であるが、この場合でさえ、必ずしも構文の多義性の例とはいえず、すでにsaveについてみたように、動詞の多義性の例であることもある。百科事典的知識の視野のもとに動詞の意味論を突き詰めたうえでないと、構文の意味論を適正に組み立てることはできないことが主張される。

第5章では、多様な分布を示すbrushとtrimが考察され、既存の語彙論研究で不問に付されている側面に新しい解決の道筋がつけられる。たとえば、(4)でみるように、brushは正反対の出来事を表わすことができる。

- (4) a. John brushed the crumbs OFF the table.
b. John brushed the crumbs ONTO the floor.
c. John brushed melted butter OVER the loaves.

Levin and Rapoport (1988)によれば、brushは語彙的に除去や付加の意味を有しないが、語彙拡張によって(4a)では除去の意味を、また(4b-c)では付加の意味を表わすのだという。それに対し本研究では、ブラシを動かして表面接触させるという行為は、①表面にあるものを動かす目的か、②表面に水分を塗る目的か、いずれか一方と結びつくという百科事典的知識を考慮に入れ、(4a-b)を①の用法、また(4c)を②の用法と特徴づける。この分析は明らかにLevin and Rapoportの切り分けかたと対立する。そして次の2文の対比は著者の分析を支持し、Levin and Rapoportの分析を排除する。

- (5) a. Bill brushed the lint FROM the table and the dirt INTO the bowl.
b. *Bill brushed the lint FROM these loaves and melted butter OVER those loaves.

第6章で著者は、本研究のもつ理論の意味合いを次のようにまとめている。①動詞の意味記述にフレーム意味論の視点を取り込んだことで、従来提案された語彙規則の方式では捉えられない用法間の関係が捉えられる。②動詞によって表わされる出来事をめぐる百科事典的知識を考慮に入れることで、その動詞の統語分布の総体を自然に説明することができる。③同一の動詞がもつ多様な用法が語彙的なものか、それとも統語環境によるものかを問うことで多義性の一側面を解明することができる。

審査の結果の要旨

言語表現の多義性の解明という古くて新しい問題は、現在なお、理論的に深化の途上にあるといつてよいが、従来の研究の立脚点を大きく切り分けていえば、ひとつは語彙意味論の立場であり、もうひとつは構文文法の立場である。構文文法は語彙意味論の限界を超えようとするところから出てきたもので、個別の語彙項目と同じく、個別の構文型にも一定の固有の意味が張りついているとする立場である。そのなかで最も注目されているのが Goldberg (1995) で、Goldberg は構文文法の考えかたを項構造の分析に導入し、語彙意味論的アプローチよりはむしろ構文文法的アプローチの優位性を主張する。

そうした背景のもとに本著者は、Goldberg の分析に批判的検討を加え、改めて動詞と構文の間の適正な役割分担はどうあるべきかを問う。この問題設定は時宜をえたもので、両極のいずれかに振り子が振れすぎることでは生ずるゆがみを是正しようとする意欲的な試みである。ここで著者のとる立場は、Fillmore (1982) によって提唱されたフレーム意味論の視点を取り込むことによって語彙意味論の拡張可能性を突き詰め、その結果として構文文法の適正な役割を同定しようとするものであり、この方法論の有効性は著者の厳選した動詞群の実証的分析と新事実の発掘によって十分に証明されているといえる。

本論文は、以上のように、現代言語学の最先端の課題に果敢に取り組み、著者の所期の目的を十分に達成しているだけでなく、言語表現の多義性をめぐる一般理論の構築に新しい方向を示唆するもので、学問的理解の進展に大いに寄与する業績として高く評価される。ただ、惜しむらくは、細部に論理的・概念的詰めの甘さが多少見受けられ、それが中身の不透明さや理解の妨げの原因ともなっている。これは英語表現力とも無縁ではなく、緻密な論理構成にさらに習熟する努力が求められる。

よって、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。